



諧調は偽りなり 上巻 奥付

昭和五十九年三月一日 第一刷

定価 一、一〇〇円

著者 瀬戸内晴美
せとうち はるみ

装幀者 司 修

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三 郵便番号一〇二

電話東京(〇三)二六五局一二二一

本文印刷 理想社印刷所 附物印刷 精興社 製本 矢嶋製本

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

諧調は偽りなり（上巻）

瀬戸内晴美

美は乱調にある。

諧調は偽りである。

——大杉栄

1

今年の節分の頃であつた。祇園の末吉町のお茶屋「みの家」の二階で、私は自作の「京まんだら」が大阪の舞台にかかるといふので、その宣伝のための記者会見に臨んでいた。

あまり広くもない二階は、二つの部屋の境の襖をとり外し、五十人くらいの人々がすし詰めになり、身動きも出来ないくらいであつた。報道関係の記者やカメラマンがほとんどで、床の間の側に並んでいるのは、原作者の私や脚色者や、演出家に、重なる出演者の俳優たちであつた。

「京まんだら」は祇園を舞台にして、京の四季の風物と、お茶屋の女将や芸妓たちの生活をないまぜたもので、ヒロインのお茶屋の女将というのが「みの家」の女将をモデルにしていた。劇場側では宣伝効果を狙い、わざわざ記者会見も、舞台になる「みの家」という運びになつたらしい。

私が所用で少しおくれて着いた時は、すでに、女優さんたちと記者の間で話が弾んでいて、和やかな雰囲気がかもされていた。

型通りの原作者の感想や、舞台化への期待が問われ、それに私が答えてしまうと、その日の会見の目的は、ほぼ終ってしまった。

そこへ頃合を見計っていたらしく、女将が挨拶に顔を見せた。

舞台で女将の役に扮する木暮実千代さんがその時、真紅のロングドレスの膝をちょっとすめるようにして女将に声をかけた。

「女将さん、甘粕大尉の恋文を持っていらっしゃるんですって……小説に書かれてるあれは本当のお話？」

「へえ、ほんまどす。『京まんだら』の中に書かれてるような男はんと結構な目にはあまり逢うてまへんけど、甘粕さんの話はほんまどっせ」

記者たちが急にまた色めきたってきた。

「甘粕って、あの大杉栄たちを殺した甘粕のことですか」

そう聞いたのは一座の中でも年輩の記者で、若い記者やカメラマンは、その名前から呼び覚まされるイメージはないようだった。

「へえ、そうどす。うちがお目にかかったのは、もう満洲へいてられて、満鉄のお仕事してられた頃どす。うちはまだ十七くらいの時どした」

それからひとしきり、記者と女将のやりとりがつづいた。話上手の女将の話に、記者がすっかり釣りこまれてしまった。

私は女将の話を聞きながら、同じ話を、やはりこの座敷で女将からはじめて聞いた時のショックを思い出していた。

「この床柱がもし口がきけたら、そもう、いろんな秘密を喋りますやろなあ。経済界の内緒話から、政治の内幕から、軍の秘密やら、役者さんの密かごとから、何でもこの床柱はのみこんでまっせ」

女将は、柔かな口調でゆったりいいながら、私の盃に酒をつぎたしていた。祇園を書くことを思いつてから、もう一年ばかり通い、ようやく、女将の口からぼつりぼつり、本音の話が聞かれはじめていた。

それでも女将が実名を出す客の名は、すべて故人になっている。戦争中の誰でも名を知っているような軍人や参謀や、政治家の名が次々出てくる中で、私が思わず膝を乗りだした名があった。甘粕正彦憲兵大尉。

「甘粕がどうして」

私は息をのむような思いでつとめて平静をよそおい、女将に話をうながした。女将は今、記者たちに話しているのと同じことをその時も私に語った。

生家が没落し、十四で祇園のお茶屋に女中奉公に出た女将が、十七の時、客として現われた甘粕に逢った。

甘粕はいつでも数人の取巻きと一緒に、金の散じ方が気前よく、しかも、祇園で軽蔑されるような金趣味の途方もない使い方はせず、程をよく心得ていた。それは、年季をかけ、遊び馴れた者でないと会得しないことだ。

芸者や舞妓の扱いも品がよく、芸者や舞妓を遊ばすことを心得た粋な客だった。

「何より、そもうええ男ぶりのお方でしたえ」

女将は甘粕の美男ぶりを強調した。なぜか甘粕は美貌や芸達者の芸妓や舞妓には目もくれず、まだ垢抜けない女中のちま子を格別最真にした。芸妓たちが嫉妬するほど、他目よめめもはばかりない

で傍に引きつけておきたがる。お茶屋としても、金放れのいい上、つれてくる客が、大臣や大将でなければ財界の大物というような、今を時めく人種ばかりなので、上客中の上客であつた。甘粕が氣に入っているなら、甘粕の座敷につきっきりでもよいということになり、ちま子は甘粕が来れば専属の女中になつてしまつた。

箱根や熱海への遠出にも、甘粕はちま子を必ず伴つていく。

満洲へ帰るときは、お茶屋へちま子の顔が立つよう十二分の金を置いてくれるし、ちま子自身にも手にしたこともないほどの大金を無造作に残していった。

「もう満洲へ帰るだけだから。帰れば向うに金はあるから、これは使いきつていいんだ。きみは何に使つてもいいが、必要ないなら、貯金しておきなさい」

ちま子は、甘粕がなぜ自分をそれほど可愛がつてくれるのかわからなかつた。

「うちのどこがよろしいんどっしやろ」

不安になつてきくこともある。

「色町の女という感じがしないところだよ。女は顔だけじゃない。女だつて心がけ次第で一かどのことは出来る。きみは利発だからきつと真面目にやれば、お茶屋の女将くらいには早くになれるよ。しつかりやるんだね」

という。早くに父をなくしていたちま子は、逢えば必ず説教めいた教訓を垂れる甘粕が父親のように頼もしくなつかしく思えてきた。

嫉妬した芸妓の誰彼から、そのうち甘粕は殺人者だと聞かされた。ちま子はそれを黙っていることが出来なかつた。

「何だ、知らなかつたのか。それは本当の話だよ。私は大杉栄と、野枝と、大杉の甥の橘宗一という子供を殺して、軍法會議にかけられた。刑に服して出て来たんだ。おれは軍人だったからね。

軍人は命令には従わなければならぬ。あれは上からの命令でやったんだ」

ちま子は黙ってしまった。子供まで殺さなくてもいいのにと考えたが口に出来なかった。

まるでその心を見抜いたように甘粕がいった。

「子供は可哀そうなことをした。今でも可哀そうなことをしたと思う」

女将は私にそこまで語り、

「そのお話はそれっきりしかししまへんどしたけど、あれは日本のためやったんだといわはつて、あんまり悪びれてもおいしまへんどした」

といった。それから懷に手をいれ、帯の奥から何かをずるずる引きだしてきた。いくらか黄色くなった白羽二重に包んだものは、甘粕からの手紙だった。三通のその手紙は、見事な流麗な達筆で、すべて巻紙に毛筆だった。中味は、さっぱりした文章で、情緒のこもったものではない。模範手紙文集の中の例文のような文章で恋文と呼べるものではなかった。しかし女将にとっては、体を大切にとか、風邪を引かないようにとかいう一言で、恋文のような感動を呼びおこす力を持っているようであった。

私はこの手紙を甘粕の手が書き、紙を指が巻き、この封筒にいれ、あるいは彼の唾で封をしたのかと思うと、胃の奥がしびれるような痛みを伴うほどの緊張が、湧いてくるのをどうすることも出来なかった。

写真で見た甘粕、軍法会議の調書で見た甘粕の供述、人々から伝え聞いた満洲での甘粕の言動……そのどれから、なぜか私は甘粕正彦という人物の実体が掴みきれなくて苛立っていた。

どの場合も、私の思い描く甘粕の影像のまわりに、灰色の霧のようなものが立ちこめていて、甘粕の実像をおおいかくしているような気がしてならなかった。

今始めて、私は生身の甘粕の呼吸を聞いたような感じがしてきた。

甘粕のことは長い歳月、私の中で不気味な腫瘍のように生きつづけていた。いつかは切除しなければならぬ存在なのに、その機会が掴めないでいたのだ。

昭和四十年の四月号から十二月号までの「文藝春秋」に、私は「美は乱調にあり」という小説を連載した。それは大杉栄と結婚し、関東大震災のどさくさの時、甘粕憲兵大尉の手で、大杉やその甥の橘宗一少年と共に虐殺された伊藤野枝の短い生涯を書こうとしたものであった。

私はその小説を、当然、三人が虐殺されるところまで書くつもりで取りかかった。ところが現実では、私の小説は、大杉が「自由恋愛」という持論の実験に、妻の堀保子と、恋人の神近市子と、伊藤野枝の三人を愛し、その関係がこじれて、神近市子が日蔭茶屋で大杉を刺すという事件のところで終ってしまった。

その時点でも、伊藤野枝という野性の少女が、九州の片田舎から氣にそわぬ結婚生活をふり捨てて逃亡し、平塚らいてうの始めた「青鞥」に身を投じ、我國ダダイストの元祖と呼ばれる辻潤と結婚し、やがてアナキストの大杉栄にめぐりあい、彼の「自由恋愛」の実験のメンバーの中に組み込まれ、辻とその子を捨て、大杉の許に走るといふ波瀾に富んだ情熱的な生き方の中から、一人の目覚めた新しい女として、急速に成長していく過程は伝えることが出来たと考えていた。しかし、やはり作品が尻切れトンぼに終わったということは、氣になっていた。

幸い「美は乱調にあり」は、単行本でも文庫本でも読者を得て、版を重ねつづけて今に至っている。読者からは、なぜ、日蔭茶屋事件で筆を折ったのかという質問を度々受け、後も書くべきだという勧誘や叱責ももらっていた。

私が日蔭茶屋で一たん筆を折ったには理由があった。

連載中、しきりに未知の人々から手紙や電話を貰い、その人々が口を揃えていることは、甘粕は誤解されている。彼は世間に伝えられているような悪人ではなく、実にいい人間で、満洲で自

分は彼の部下だったけれど、温情を受け、あんなやさしい人間はいないと思う。というような類いのものばかりであった。彼等は揃って、「美は乱調にあり」で必ず書かれる筈の大杉たち虐殺事件の時、甘粕を従来のような見方で書かないでくれというのであった。

中には、仕事で知りあったテレビ局の局長や、編集長にまで、同じことをいう人があらわれてきた。

私はもちろん、自分の考えで調べるだけのことは調べていたし、甘粕という人間の置かれていた立場も認識しているつもりであった。

どんな理由にしろ、大杉たちを虐殺したのは彼なのだとしたら、その人物が他の人間に對して、如何に優しかろうと、温情にみちていようと、彼の犯した殺人罪が消えるわけではないのであった。

けれども、私はあまり次々押しよせてくる甘粕善人説を聞いているうちに、見定めていたつものの甘粕像に黒い霧がかかってしまつて、しっかりした影像が掴めなくなつてしまつた。どう払つても払つても霧は執拗に甘粕の影像をかくして晴れようとはしなかつた。

そんな曖昧な人間の殺人の現場が、どうしても私には書けそうにない。思いあぐねた末、私は一応前編とするつもりで「美は乱調にあり」を手放したのであった。

もちろん、その後も、後編を書くべく、折にふれ、私は資料をためつづけていた。そして一日も早く、甘粕のイメージを、明確に自信を持つて自分のものとする必要があると考へていた。

そんな時、思いもかけない場所、思いもかけない人物から、甘粕についての話を聞かされたのだから、私の愕きも当然であつた。

「京まんだら」に私は女将と甘粕の恋文のことも少しは書きこんでおいた。そのエピソードを入れることで、ヒロインにリアリティが出ると考へたからであつた。

記者会見の席で女将の話が終ると、当然記者たちは、甘粕の手紙を見せてくれといった。

「すんまへんなあ、実はあんまり肌身につけてましたら、傷んでしまったさかい、今は銀行の金庫に預けてしまってますん」

一座がどっと笑った。その笑いの波がまだ収まらない時、木暮さんがいった。

「わたくし、戦争中、主人と満洲にいておりましたでしょ。その時、甘粕さんは満映の仕事をしておられて、私たち大へんお親しくしておりましたのよ。そりゃ羽振りのいいお暮しでした」

私は思いがけない話になったので聞き耳を立てた。いわれてみれば、当然のことだが、まさか、今日、「京まんだら」の主演女優の口から甘粕のことを聞くことは予測も出来なかった。

「自決した時も御存じですか」

「その場に居あわせたわけではございませんのよ。でも自決なさったことは事実でございます。それより、なくなられる前の日に、わたくしお目にかかっておりますの。突然、甘粕さんからお招きがあって、わたくしたち、在留日本人の奥さんたちがあの方のおうちへ集められましたの、もうソ聯が国境を越えてなだれのように入っていた時ですから、もちろん、わたくしたちも気が気じゃない時でした。甘粕さんは、わたくしたちが全員揃ったところで、こうおっしゃいましたの。みなさん、もうソ聯軍は明日にも新京へ入って来ます。みなさんは、覚悟を決めて、大和撫子らしく身を処して下さい。逃げるのも残るのもみなさんの自由です。こんなふうになさんと集めるのも今夜が最後でしょう。今夜は何もかも忘れて、うんと御馳走をたべてパーティを楽しんで下さい。さて、今夜わたくしからみなさんにすてきなプレゼントをさしあげます。いいですか、わたくしが日頃宝石を愛して集めていたのを御存じでしょう。こうなってはもう宝石を持っていたてもソ聯軍に奪われるだけだから、みなさんに形見にひとつずつさしあげます。さあ、それを聞くと、浅間しいでしょう。わたくしたち、思わず嘆声を發しましたのよ。あの方が大へんな

宝石道楽でいらして、いろんな宝石をたくさん集めていらっしゃるのにはみんな知っていましたの。宝石だけじゃなく、何しろ、あの方はおしゃれさんで、着る物も、持ち物も、世界の超一流品で固めていらっしゃいました。女中さんがいつのまにか銀のお盆に赤いなめし皮のすてきな宝石箱をのせて目の高さにささげて入って来ました。

わたくしはその時、心の底で思いました。日頃、甘粕さんはわたくしのことを好意的に思ってた下さってるし、主人とも仲がよかったから、きっとわたくしにふさわしい宝石を下さるわ、ダイヤかしら、エメラルドかしらなんて、虫のいいことを思いめぐらせていました。明日死ぬかもしれないという時にでも人間って、ずいぶんのんきになれるものですよ。甘粕さんは、宝石箱から、すでに一粒ずつ白い紙につつんだ宝石を取りだされて、わたくしたちを一人ずつお呼びになって、御自分の手でわたくしたちの掌の上に、宝石をのせて下さいました。すぐ見たかったですけど、帰ってから御らん下さいとおっしゃるものですから、みなさん、開けるのははしたないと思って、その晩は御馳走をいただいて帰りました。帰ってあけてみましたら、何の宝石だったとお思いなって？」

美しい女優は一気にそこまで見事な話術で人々を引きよせてきて、彼女の特徴の艶然とした微笑を浮べて、一同を見廻した。そして声を一段落していった。

「青酸カリでした」

ため息のような凝った気配が座敷に湧いた。

「あの方が自決なさったのは、その次の日でした。せっかくのプレゼントを用いなかったの、わたくしは今こうして生きております」

かつて私が触った巻紙の感触が指の腹に疼くような気がしてきた。あの時以上に甘粕という人間の存在感が伝ってくる。同じ祇園のお茶屋の、しかも部屋まで同じ場所で甘粕大尉の亡霊があ

らわれたような気がして不思議であつた。

甘粕の自殺は、様々な伝説を産んでいた。

中国の古い刑罰に手足を馬の足にしぱりつけて、八つ裂きにするという残忍な方法があるが、甘粕は自決ではなく捕えられてその刑を受けたのだとか、割腹だとか、いやピストルでこめかみを打ちぬいたのだとか、死んだと見せかけたのは替え玉で逃亡したのだとか……。

「神近市子自伝わが愛わが闘い」は昭和四十七年三月に発行されているが、その中に次のような一節がある。

——甘粕は三年の刑をすませるとまた兵役につき、大連あたりで大杉虐殺のようすを手柄話のように語っていたという。その後、太平洋戦争が終つた日、彼は自殺し、平素その横暴を憎んでいた部下によって、死体は一寸刻みに寸断されたという。

私の読者の一人で、その現場に居合わせ、部屋の入口で阻止されたのを振りきって、自殺の現場にはいった人がいる。

「死体は非常にむごたらしい状態でした。しかし、それまでにうけた弾圧と乱暴の激しさ、あくどさと思うと、止められるのを押してはいり、さらにメッタ切りに刀を振るわずにはいられませんでした」——

その説は、満洲で甘粕と親しく接した望月百合子によって強く否定され、神近市子ともあろうものが、他人の言葉を鵜呑みにして調べもせず書き残すとは何事だと非難している。

様々な伝説が死にまつわる程、甘粕という人間は多角面を持った複雑な人物であつたのかもしれない。

その上、甘粕たちの供述だけで、大杉たちの虐殺の模様も、真相は曖昧なままだったのが、当時の死体を検死した医師の診断書なるものが、半世紀ぶりにあらわれるという事件もおこってい